

言ふまいと思へど今日の暑さかな……そんな暑さが続く毎日ですので、本欄も多少肩の力を抜いたテーマを選んでみました。わが国通販の歴史を語るとき、大抵は“今日の通販スタイル”が形成され始めた昭和30年代後半からということになり、戦前あるいは明治、大正時代の状況はほとんど藪の中といった感じです。本欄では日本における近代郵便制度の発足とほぼ時を同じくして始まった明治時代の通販まで逆上って紹介してきたわけですが、お読みになって「明治時代の通販会社も、なかなかやるじゃないか」と感じられた方も多いかと思います。今日われわれが行っている返品制度や保証制度、割賦販売、限定販売といった顧客サービスや販促施策、数百ページの総合カタログ、顧客管理に基づくフォローなどが、すでに明治期に採用されていたことを知ると、いつの時代でも考えることはあまり変わらないのだなあというのが実感です。

このように、わが国通販史を明治まで逆上って語られることはきわめて少ないので、では、それ以前に“通販”

的な商売が存在したかどうかということになると、まず語られたことはないでしょう。ところが、なんと江戸時代にも「通信販売」が行われていたことが判ったのです! 正確に言うと、江戸時代の文政年間に刊行された「江戸買物独案内(えどかいものひとりあんない)」というショッピングガイドに通販の広告文が載っていると、近世史学者の八木敬一氏が「江戸学事典」に書いているのを、筆者が見つけてびっくりしたのです。八木氏の場合、通販やビジネスに関わっていないので、ごくアッサリと片づけてしまっているのですが、われわれにとっては、通販対象商品も含め、大いに興味をそそられる記述です。

では、その広告コピーをご紹介しましょう…「女小間物細工所 鰐甲水牛薬法妙葉 江戸両国薬研堀四ツ目屋忠兵衛 諸国御文通ニ而御注文之節は箱入封付ニいたし差上可申候」。大体は想像できるかと思いますが、詳しい解説と、どんな商品が通販されていたかなどは、スペースの都合で次号に譲ります。それにしても、人間の考えることはあまり変わらないなど改めて感じます。

前号で紹介した江戸時代の通販広告コピーの解説の前に、同時代の母袋未知庵(もたいみちあん)という人が著した「川柳四目屋攷」という本に載っている「四ツ目屋」取扱い品目を列記してみましょう…長命丸、女悦丸、男根危檣(ほばしら)丸、りんの輪、りんの玉等々、薬七種、道具八種、などなど。道具の中にはもちろん張り型もあります。もうお分かりでしょう。四ツ目屋というのは、当時の両国(現在の東日本橋)薬研堀にあった有名な秘具・秘薬の専門店なのです。同店のベスト&ロングセラーアイテムの長命丸は、田舎のお婆さんが長生きの薬だと勘違いして買いに来たという話が残っていますが、実は男性の持続時間を長くする薬で、同店の元祖が明応年間(1500年頃)に長崎に行って開発、寛永年間(1630年頃)から同店で売り出したとされています。こうした秘具・秘薬は明和期(1770年頃)の性教育本「艶道日夜綱目」「女大樂宝開」「女用婦見鏡」などに挿絵入りで解説されています。

そこで例の広告コピーの内容ですが、意訳すれば「女性をナニする商品各種。鰐甲・水牛製、オランダ処方の妙

薬。江戸両国薬研堀の四ツ目屋忠兵衛宛に各地方から文通で注文されれば、他人にわからないよう箱に入れて、しっかり封をして送付します」ということでしょうか。さてその値段ですが、長命丸の場合、建値1包64文を半額の32文で売ったと言われ、また時代によっては1包56文で販売されたと言います。当時、何でも4文銭1枚で食事ができる四文屋という店があり、これが今だと100円均一の感覚ですから、1文25円で換算しますと、32文は800円、56文だと1400円になります。1人平均何包まとめ買いしたのかは記録にありませんが、長命丸は「紅毛(オランダ)長命丸」とも呼ばれたことから、当時としては今日のバイアグラのように利用されたようです。ところで余談ですが、田舎のお婆さんが間違えて長命丸を買って飲んだらどんな具合になったとかいう「都の手ぶり」なる本に載った話が、どうしたわけか明治になって女学校の国語教科書に紛れ込んでしまい、大騒ぎになったそうです。次回は江戸の通販の結びとして、そのビジネス環境について少しばかり触れてみたいと思います。

江戸両国にあった「四ツ目屋」が、強精剤をはじめとする秘薬や性具を、店舗売りと併せて「通信販売」していたことを前回、前々回でご紹介しましたが、こうした販売方法を可能にした背景には、江戸という当時世界最大の都市におけるビジネスの活況があったことを見逃すわけにはいきません。橋がなかったために多数の犠牲者を出した明暦の大火の後、両国橋が架橋されると、この両岸は江戸随一の盛り場となつたのです。相撲、見世物、芝居小屋ばかりでなく、様々な店がアイデアを競い合い、四ツ目屋もたいそうな話題の店の一つだったようです。当時は、今の国技館のある墨田区側を東両国と言い、東日本橋の辺りが両国とよばれていたのですが、四ツ目屋があった場所のほど近くに現在も同様の通販会社が活躍しているのは何か因縁を感じます。江戸時代はまた、たいへんな出版ブームで、今でいう劇画本の黄表紙、小説本の読本などのほか、江戸案内、江戸買物独案内といった観光やショッピングのガイドブックが多数刊行されました。これらのガイドブックに広告を出したり、戯作者の式亭三馬のように

自著の中で本人が作った化粧品をちゃっかりPRするとか、引札と呼ばれたチラシを撒くとか、あの手この手の宣伝が行われました。こうした宣伝が有効に働いたのは、当時の日本人の識字率が極めて高かったからです。江戸時代後期の町人の識字率は実に90%、当時最も産業が進んだイギリスの大都市でさえ識字率25%だったのと比較すれば違いは歴然です。では、手紙を届ける方法はどんなだつたでしょうか。幕府の用飛脚や大名飛脚のほかに町人による飛脚が出現したのは18世紀。大手の飛脚業者の中に「十七屋」と呼ばれた元締め業者がいましたが、この屋号は十五夜の次の十六夜の月を「いざないの月」、十七夜の月を「立ち待ち月」ということから「たちまち着く」とシャレたものなのです。江戸時代は判じ絵の看板など、とにかく洒落っ気が多かったようです。江戸町内の連絡には、鈴をつけた「ちりんちりん飛脚」が登場し、芝から吉原までの距離だと今の貨幣価値で約600円程度で届けたようですから、まあバイク便の感覚に近いかなども思われます。江戸はこのへんにして、次回からは明治、大正期に戻ります。

<江戸> 四ツ目屋（引札）

